



「パキスタン/ギルギットの帽子屋さん」

撮影:今村 旭(ネパール教育支援/NPOネパール・ミカの会)

‘わんりい’ 158号の主な目次

北京雑感(49)「北京の秋」	2
私の調べた四字熟語(47)「昼夜兼行」	3
媛媛讲故事(27)「八仙の伝説Ⅷ・曹国舅」	4
農民画(14)「とんぼ」	6
埼玉県山西省友好会館「神怡館」を訪ねてみませんか	6
松本杏花さんの俳句集・「千里同風」より	7
アジアを読む(71)「娘と話すアウシュヴィッツってなに?」	7
黄土高原・やぶにらみの旅(2)	8
【活動報告】京劇俳優・殷秋瑞さんと読む漢詩の会Ⅱ	11
福建見聞録(1)「結婚事情」	12
スリランカ紹介(43)「町田市自然休暇村・旅行記」	14
アフリカとの出会い(47)「マサイの企業戦士」	16
私の四川省一人旅(39)「稻城で」	17
‘わんりい’ 掲示板	20

【表紙写真説明】 パキスタン、アフガニスタンで男性達がよく被っている帽子を売っている店。この地方の成年男子は100%髭が濃い。この容貌に、フライパンに似たこの帽子を被ると農民ともタリバンとも区別がつかない。

気に入った3個を求め、家で被ったが、髭のない顔には全くの別物としか見えず、やはりこの地方の人でないと似合わないと思った。がっかりだった。(今村)

【この頃思うこと】

町田国際交流センター主催で任書剣さん監督の『私の叙情的な時代』が上映された。尖閣諸島での衝突事故以来、日中の関係が再びぎくしゃくしているように見える。中国は分からない国だという人も多い。任さんの映画は語る。人と人を結びつけるのはイデオロギーではなく、温かな血の通う人間どうしとしてお互いを思いやる心なのだ。

今は、私達の周りには外国の方がいっぱいいる。身近な所で人と人の心が通い合う関係を築くことが、国の方針に縛られず、揺るがぬ友好の土台を築けるのだと思う。‘わんりい’の活動と関わる中国の皆さんを知る限り、中国は全く分からない国ではない。大いなる文化と歴史を持ち、温かな心や心配り、物事への集中力や熱意などなど、知識も豊富で素晴らしい人たちが生まれて育った国でもある。人見知りせず交流して仲良くなりたいと思う。(田井)

北京を旅行するのに一番良い季節は秋だとよく言われます。中国語には、“秋高气爽(qiū gāo qì shuǎng = 秋空が高く空気がすがすがしい)”という言葉がありますが、北京で生活していて、“時折”この言葉を実感して感激しました。北京の秋には、日本のように活発な秋雨前線の活動もなく、天気安定していますので、本来は毎日が“爽快な”筈です。ところが最近では自動車の排気ガスのせいで、朝起きて、抜けるような青空を目にし、すがすがしい空気を胸いっぱい吸い込める日は少なくなり、短い秋はすぐ去って、冬将軍と入れ替わります。

日本でも秋・冬は空気が澄んでいるので、遠くから富士山を見るのには最適な季節と言われます。中国大陸も同じような状況のはずなのに、北京の冬の空気が「爽快」でなかったのは、暖房のために石炭を燃やすので空気がどんよりとしていたからです。石炭の煙で太陽光が遮られ、外気の冷たさを余計感じたものでしたが、最近では、石炭の使用は厳しく規制され、煙を吐く煙突は殆ど見かけなくなりましたので、今なら、冬の空気も秋に劣らず爽快なはず。

しかし、現在北京の空は、季節に関係なく一年中爽快感とは無縁な、淀んだ空気に覆われています。これは、日本を追い抜いた自動車保有台数のせいです。国全体の自動車保有台数は、既にアメリカに次いで世界第二位になったようですが、人口の多さ、国土の広さを考えれば不思議はありません。ところが、最近中国人の友人が、北京市内の自動車台数が東京都の保有台数を抜いたと教えてくれました。真偽の程は確認していませんが、最近の北京市内の様子を見れば、納得してしまう話です。

3年前の北京でも、住まいの窓から見える西三環の自動車通行量はかなり多く、朝は南行方向、夕方は北行方向で時折渋滞が発生していましたが、現在は、朝夕両方向とも毎日のように渋滞が発生しているそうです。渋滞が頻発するのでは、通勤には不便ですし、地下鉄の路線も増えたので、自動車通勤をやめれば良いのと思いますが、持っていると乗りたくなるのが自動車ですから、簡単には自動車通勤が減らないようです。

今北京では、日本と同じようにハイブリッド車がよく売れるようになり、北京市政府は電気自動車の製造・販売に対する優遇措置を検討しているようですが、これらは将来を見据えた話で、現在は、今走行中の自動車に対する排ガス規制をどう行っかが問題です。因みに、北京オリンピックの時に始めた、曜日毎に、走れる車を登録番号で制限する規制は、現在も続いているそうです。

東京でも数十年前には、排気ガス公害の酷い時期がありましたけれど、現在は余り問題にならなくなりました。

北京は、状況が今より少し良くなりさえすれば、東京より道路が広く、東京のように建物が道路際まで迫っていない分、かなり緩和されるのではないかと、素人考えで期待しています。

北京の秋の楽しみの一つである爽やかな空気は少なかりましたが、北京の秋には、他にも楽しみがあります。焼き芋と甘栗です。

立秋の声を聞くと、気の早い焼き芋屋さんを見かけるようになります。日本の焼き芋さんのように拡声器で叫びながら移動するようなことはないので、多くの場合、匂いで其の存在を知ります。

初めて北京の焼き芋を食べた時、そのねっとりした食感と甘さに感激して以来、「焼き芋は北京に限る」と思い、日本から友人が来る度に焼き芋をご馳走するのですが、友人の為に買う時は、不思議とホクホク系のお芋にあたるのでした。それはそれで美味しいのですが、私の「目黒の秋刀魚」ならぬ「北京の焼き芋」は、ねっとり柔らかく甘いもので、友人にもそんな焼き芋を食べてもらいたいと思うのですが、うまく当りません。

そこで自衛策を編み出しました。先ず売っている焼芋をじっくりと観察します。焼けた皮の切れ目に蜜が滲んでいるようなのがあたりです。それでも最初は一番小さなを買って、自分のものになってから割ってみます。割ってみて、美味しいお芋なのを確認してから、改めて必要な量を買います。これなら失敗なく、美味しいお芋が手に入ります。

その点、美味しい甘栗を手に入れるのは簡単です。北京の友人が教えてくれたのは、行列の出来ているお店で買えば間違いがないということです。私の知っている一番近いお店は、平安里大街に面したお店ですが、秋以外の季節には、それと気づかずに通り過ぎてしまうのです。ところが秋になると、バスに乗っていても、長い行列が目に入り、上を見ると栗の絵が描かれた真新しい看板が掛かっていて、甘栗屋さんと分かります。

このお店は種類の栗しか売っていないので、20人位並んでいても、焼きあがったばかりなら10分程で買うことが出来ますが、それが終わってしまうと、次の鍋の栗が焼きあがるのを待たなければなりません。行列をしながらガラス窓の向こう側を覗くと、1mもある大きな中華なべを4台並べ、職人さんが1台に1人付いて、中の栗を絶えずかき混ぜながら焼いています。職人さんの手元を眺めているうちに、順番が来て1斤(500g)買うと紙袋に入れて手渡してくれます。暖かい袋を胸元に抱えて家路を辿ると、不思議と幸せな気分になってきます。北京で、私が一番好きなひとときです。

昼夜兼行 (ちゆうやけんこう)

私が調べた四字熟語 47

三澤 統

昼も夜もなく継続して事をなすことを表す言葉に「昼夜兼行」があります。具体的には「地震によって倒壊したビルの復旧作業が昼夜兼行で実施されている」「この度の緊急事態への対策会議が昼夜兼行で続けられた」のように使われます。今回のテーマはこの「昼夜兼行」を取り上げてみました。

実は、中国語には「昼夜兼行」という表現はないようですが、中国語で“夜以繼日”という成語が、物事を昼も夜もなく続けて行なう、物事を夜を昼に継いで行なう、というような時に使用され、日本語の“昼夜兼行”と同義となっているようです。そこで今回は、“昼夜兼行”に代えて、“夜以繼日”について紹介したいと思います。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲三省堂現代国語辞典：

「ひるもよるも休まずに続けておこなうこと」

▲小学館中日辞典：

「夜以繼日 夜を日に継ぐ、昼夜兼行する。日以繼夜とも言う」



周の武王は殷を滅ぼした後に西周王朝を打ち立てました。しかしながら大業を成さぬうちに亡くなってしまい、わずか13歳の息子が王位を継承し、周の成王となりました。成王はまだ年少でしたので、武王の弟である周公¹⁾が成王を補佐して朝政をとりしきりました。

周公は大変有能であったので、兄の武王が殷と戦った折には、良く武王を助けて多くの戦功をたてたのです。そして朝政を補佐するという重責を担うことになってからは、倦まずたゆまず忠実に職務に励み、急な公務が生ずれば、何をしていても、直ちに公務に戻りました。

そのような周公の猛烈な勤勉ぶりを見て、当初、何人かの貴族たちは、周公に君位を奪おうという野心があるのではないかと疑い、紂王の子の武庚を担ぎあげて叛乱を起しました。その折に東方の夷人も機に乗じて乱を起したのです。しかし周公は成王への忠誠心を発揮して見事にその乱を平定しました。そのことにより、周公に君位を奪おうとの野心があるのではないかと疑った貴族たちの誤解もすっかり解けました。



イラスト：叶霖 (yè lín)

周公は、武庚と夷人たちを打ち負かした後は、礼法²⁾や刑法を制定し、諸侯に領土を分け与えるとともに洛邑城を建築し、東都の成周を設立しました。ところが東都設立後ほどなく周公は過労によって亡くなりました。

死を目前にした周公は大臣たちを自分の周りに集め、成王を補佐して中原³⁾の管理をしっかりとやるように、そして自分の死後は成周に埋葬して欲しいと依頼しました。

四字熟語「夜以繼日」は、後の戦国時代の孟子は周公が国家のために心血を注いだ精神を尊敬し、高く評価して述べた言葉、「周公思、兼三王、以施四事。其有不合者、仰而思之、夜以繼日。幸而得之、坐以待旦」(孟子・离娄)がその由来になっています。

「周公は夏、商、周の三代の王が行った四つのことをあわせ行こうと考えたが、もし今日の時代に適合しないことがある時は、天を仰いで思案を凝らし、夜も考え続け、さいわいしてよい考えが浮かぶと、ただちに実行しよう」と夜の明けるのを待ちかね、そのまま寝もせず、夜の明けるのを待ちかねていたのである」。

■注

- 1) 周公：中国、周初の政治家。文王の子。姓は姬、名は旦。兄の武王を助けて殷を滅ぼし、その死後、幼少の成王を補佐して周の基礎を固めた。孔子は礼を整備した聖人として尊敬し、後世、先聖とあがめられた。魯の祖。周公旦。(三省堂、大辞林)
- 2) 礼法：周代の儀式・儀礼について書かれた「周礼」、「儀礼」を著したとされる。
- 3) 中原：黄河流域・下流の地域。現在の河北省の大部分と山東省の西部および河北・山西両省の南部に対する旧称。(小学館、中日辞典)

今回紹介する「曹国舅」の名前にある「国舅」は、中国語では皇后の兄や弟であることを示しています。

これまで紹介した八仙人たちは皆、唐代の人物として伝えられていますが、この「曹国舅」は、宋代の人で、宋の仁宗皇帝の後である曹皇后の弟だといわれています。それが本当だとすると

「曹国舅」は堂々たる貴族の出身ということになりますね。ですからその姿も、李鉄拐や、藍采和などの貧しい身なりとかなり違って、手に笏を持ち、豪華な役人の服を着、役人の帽子を被り、玉の帯を付け、なかなか由緒正しい人物のように見受けられます。

伝えられている話では、曹国舅はもともと豪華な生活にも強い権力にもあまり興味を持たず、道教に深い関心と興味を寄せていました。彼には弟がおり、その弟も当然ながら曹皇后の縁者ということで、人々から「国舅」と呼ばれる身分です。しかし、その弟の方は自分が宮廷の縁戚に繋がることを恃んで、百姓たちの土地を奪ったり、美しい女性を見れば有無を言わず強引に自分のものとし、時には悪人と結託して悪事を働くなど非道の限りを尽くしていました。曹国舅は常日頃、折を見ては心を込めて弟を諫めていましたが、弟の心を入れ替えたくもその術は何処にもありませんでした。

ある日、曹国舅は馬に乗り、何名かの部下を連れて、郊外へ散策に出掛けました。時はちょうど春で、穏やかな陽射しが降り注ぐ中、曹国舅は爽やかな空気を胸いっぱい吸って仕事の上での煩

わしいことはすべて忘れ、こののどかな春の雰囲気を満喫していました。

と、その時、森の中からかすかな泣き声が漏れ聞こえてきました。どの方向から聞こえてくると耳を澄ませていますと、その泣き声は益々激しくなると、曹国舅のさわやかな心境はすっかり壊されてしまいました。



曹国舅は部下と共に泣き声のする方向に進んで行って見ますと、或る墓の前でひとりのお婆さんが、髪をふりみだしてわあわあと泣き叫び悲嘆にくれていました。曹国舅は部下にその理由(わけ)を尋ねさせました。

部下は戻って来ると、「おばあさんの息子が死んだそうだ」と答えました。曹国舅は「人間は誰しも、生、老、病、死から逃れることはできない。あまり悲しまないよう、よく慰めてあげてくれ」とまた部下に命じました。間もなく戻ってきた部下が、「彼女の息

子は、病死ではなく、悪人に殴られて死んだそうです」と告げました。

曹国舅は「なんということだ！もう一回行ってその詳しい事情を聞いてみよ」と言いつけました。部下は戻ってくると「ある役人が息子の嫁を奪って連れてゆこうとしたので、息子がそうさせまいと必死に嫁を庇うと息子は酷く殴られて死んだ。嫁も悲しみのあまり、自ら川に飛び込んでんで亡くなった、とっています」と報告しました。

曹国舅は大層怒って、詳しい事情を聞きたいと部下におばあさんを連れて来させました。お

ばあさんは、自分の悲しみの事情を知りたいという役人が目の前にいることを知ると、すぐさま地面にひれ伏して泣きながら訴えました。

「お役人様、どうぞ力を貸してください。息子と嫁の死に方はあまりにも可哀相です」

「いったい、息子を殺した役人は誰だ、名前を言ってみよ！」

曹国舅が聞きました。

「それは、悪名高い曹国舅なのです！」

自分達が仕えている曹国舅の弟もまた、曹国舅と呼ばれていることを知らない部下たちはびっくりして言葉を失ってしまいました。

「何を言うのだ！嘘を言うものではない。曹国舅殿は心の優しい、そして民をわが子のように愛していらっしゃるお方だと誰もが知っているではないか！？そんなひどいことをされるお方ではない！」

おばさんは、部下の一人が言うのを聞くと怒りました。

「役人同士だからお互い庇いあうのだ。でも私は嘘はっていない！」

それを聞いたその部下は更に怒りを増しておばあさんに言いました。

「よく見よ！今馬に乗られているお方が曹国舅殿だ。私たちは毎日いつも曹国舅殿と共にいるが、そのようなことをされるのを見たことはない！そのような嘘を言うものではない！」

おばさんは、自分の目の前の、その馬上の人物が、まさに曹国舅だと聞かすや、すぐさま立ち上がり、狂ったように馬のもとに駆け寄ると馬の手綱をしっかりと握り、

「お前がその曹国舅か！？。なんといいことをしたのだ！息子と嫁を返してくれ！」

と叫びました。

曹国舅の馬は、知らない人にいきなり手綱を強く引かれてびっくりし、蹄を上げるやおばあさんを蹴りつけました。おばあさんは口から血を流して倒れ、曹国舅も落馬してしまいました。部下たちは、慌てて曹国舅を助けようとしますと、曹国舅は顔色を変えて怒り、「早く！おばあさんがどうなったか見よ！」と言いました。

部下が慌てておばあさんを診ると、おばあさんは既に息が絶えていました。その報告を聞いた曹国舅は、

「弟は、国舅の身でありながら、なんと非道なことをしたものだ。国法が許すことではない！」と天を仰いで嘆きました。

実は、曹国舅はおばあさんの話を聞いているうちに、おばあさんの息子と嫁に危害を加えたのは自分の弟だと分かりました。曹国舅は、おばあさん一家に詫びようもなく、と同時に、おばあさんの怒りと悲しみの深さを推し量り、宮廷に戻ったら、皇帝に事実を報告し、弟を捕え、国法に従って処刑しようと心に決めました。しかし、宮廷に戻り皇帝にその事実を告げる前に、話を漏れ聞いた弟の曹国舅は国を抜けて逃亡してしまいました。

弟の行為は自分の恥だと深く感じた曹国舅は、官職から退くと役人の服を脱いで山に籠り、道教の真髄を究めるため仙術道の修練に励みました。

そんな風にして数年ほど経ったある日、曹国舅は、山で仙人らしい風体をした二人の人物に出会いました。二人は曹国舅に尋ねました。

「あなたが修行していると聞いて来たのだ。何を修業しているのだ？」

「道を修養している」

「道はどこにある？」

再び二人に聞かれた曹国舅は手で天を指しました。すると、更に

「天はどこにある？」

と尋ねられました。曹国舅は手で心臓のところを指しますと、二人の仙人らしい人物は「は、は、は」と大きく笑いながら、

「心、即ち天、天、即ち道だ。貴方は道教の真の道義を悟られた」

と言いました。

実はこの二人こそ、すでに仙人になっていた呂洞賓と鐘離漢でした。その後、曹国舅は呂洞賓と鐘離漢の二人から様々な仙術の秘訣を教わり、後に八仙に加えられたとのことでした。

その瞬間は今年もやってきました。

目の前を赤とんぼがふっと横切るのを見かけ秋の到来を知ります。

毎年とくに待っているというわけではありませんが、何か約束を果たされたような安堵感があるものです。今年は例年になく酷暑で、また足の長い夏でもありましたが、それでも9月も終りに近いころ、赤とんぼはちゃんとやってきました。

田んぼで年々繰り返される稲の生育サイクルと赤とんぼの生態はとても密接な関係があるそうです。先日知人が話してくれました。刈りとった稲束をはせ架けにする頃合いを待ち、それまで高地に生息していた赤とんぼは、産卵のために里の田んぼへと下りてくるのだそうですね。

秋に赤とんぼを見て胸がきゅんとしたり特別な思いがするのは、あの赤とんぼの童謡のメロディーのせいだけではなく、稲作を代々続けお米を食べてきた我々民族のDNAの作用なのかもしれません。

この絵の作者の曹さんも稲作の盛んな水郷で育った方ですから、やはり様々なトンボを日常目にしていたのでしょう。絵の中の子供たちは、空に向かって手を上げて指にト



「とんぼ」 曹金根 上海・金山農民画院

ンボのとまるのを待っているのでしょうか。

「こっちにおいて、おいで」とじっと目を凝らして姿を追っていると、確かにトンボはこんな風に巨大に見えるかもしれません。

紅葉の季節、秩父の神^{しんいかん}怡館を訪ねてみませんか ～陝北の民間芸術・黄土高原の剪紙、展示中～
📄 (ご案内：20ページ)



神に^{しんいかん}「神怡館」の愛称で呼ばれる「埼玉県山西省友好記念館」という中国寺院風建物があります。

聞いたところでは、中国仏教聖地の一つ、五台山にある仏光寺東大殿がモデルとか。1982年、埼玉県と中国山西省との友好県省が締結され、満10年を記念して、山西省の五台山によく似た風土ということで両神村(当時)選ばれ、両県省友好のシンボル施設として建設されたそうです。以来、この秩父の山間で、ひっそりと、しかし、地道に山西省を初めとした中国の歴史、自然、文化等を紹介し続けています。

この度、縁あって「わりい」が90年代末、まだ開放されたばかりの陝西省黄土高原地帯を訪れ、現地の剪紙作家等から直接分けてもらった、土俗性豊かな剪紙のコレクションを展示いただいています。それらは、町田国際版画美術館市民展示室、神奈川県立藤野芸術の家、茅ヶ崎市市民文化会館などで展示されましたが、その後、公の場で陽

の目を見ることなく眠っていました。

それから10年以上経って、改めて展示されたそれらの剪紙は、展示の仕方もよく、開放直後のものということもあってか、貧しく厳しい陝北・黄土高原地帯に生きてきた当時の人々の、祈りと願いがひしと伝わる迫力のあるもので、コレクターの一人ながら改めてその力強さに見惚れました。

11月は秩父地方の紅葉の美しい季節ですし、新そばと温泉も魅力的です。神怡館の隣は、国民宿舎・両神荘です。展示期間中に「秩父の夜祭」もあり、この機会、ご都合つくようでしたら是非、訪ねてみて欲しいと願っています。

(田井)



みずからの唐詩朗詠秋気澄む

zìshēn jīqíng yǒng
自身激情涌
tángshī hànǔ lǎi lǎngsòng
唐诗汉语来朗诵
qiū yùn tiāndì chéng
秋韵天地澄

赏析：如果说，有好酒好看好友，人的酒量肯定大增，那么，有好景好境好友呢，诗人们肯定会诗兴大作吧。本首俳句记录了作者按捺不住诗情，主动用汉语朗诵了三首唐诗的景况。虽然着笔不多，但将自身主动朗诵的心情描写的淋漓尽致，颇有日本“私小说”的文脉。

陵包む木犀の香のうつつなに

guì shù lǐ huáng líng
桂樹里皇陵
fùyù huāxiāng jìn rào yíng
馥郁花香尽绕萦
xiànrì hé qīng píng
现世何清平

季语：桂树，秋
赏析：这是作者游览十三陵时创作的俳句。中秋时节，桂香四溢，这是为帝王歌功颂德呢，还是为当今的太平盛世增光添彩呢，估计是后者吧！

〈句集の頒布について〉 松本杏花さんの俳句集、第二集の「余情残心」と今回発行の第三集「千里同風」は、価格、1000円で頒布できます。＊お問い合わせ：☎048-885-2914 (松本) 〒336-0931 さいたま市緑区原山2-40-18 松本杏花 【お詫び】10月号掲載の電話番号を上記に訂正します。

アジアを読む(71)

娘と話すアウシュヴィッツってなに？

アネット・ヴィヴィオルカ著
山本規雄訳
現代企画室

映画「悪人」を観た。人を殺したその男が祖母や恋人に見せる優しさ一果たして彼は「悪人」なのか…と私が書いてしまうと陳腐で申し訳ないのだが、この本にも

すると夜明け前から待機していた警察に捕まり、どこかへ連れて行かれて、収容され殺されてしまう。ユダヤ人という理由で。

収容所では殺戮者だったナチス兵士が、家庭では音楽を楽しみ、文学を論議する「普通のドイツ人」だったとある。一方、同じ時期、アジアの人たちを苦しめた日本は、ユダヤ人には寛容で、日本人が彼らを支援した事実もある。ヒットラーの再三の迫害要請にもかかわらずだ。

様々な要因がからんで「殺さなくてはならない」という結論に至ったとき、優しい父親は殺人者となる。戦時中の日本も同じく。

さて、もし私が当時のユダヤ人だったら。ある日、郵便受けに人口調査のため警察署か市役所に出頭するよう通知が入っている。何気なく出頭した私はどこかへ連れて行かれ収容され殺されてしまう。ユダヤ人という理由で。

いや、私なら、役所には面倒で行かないだろう。そして朝、いつものように職場へ向かうため家を出る。



運良く、私は収容所で生き延びた。しかし、仲間が殺されたのに、なぜ自分だけが生き残ってしまったのかという「罪悪感」につきまとわれ、ついには自殺まで考える。いずれにせよ、悲惨なのだ。ユダヤ人だった、という理由だけで。

解説を書いた四方田犬彦氏は「私たちはどうすればいいわけなの？」という娘にこう答えている。「何もできないさ。とにかくこれは実際に起きてしまったことなのだから。(中略)人間が救済されるのは、ただ知識と認識を通してのみなのだ。悲惨なことを知ること、想像することは、一時的には苦しい体験かもしれないが、その苦しみは永久的には続かない。ものを

知ること、最終的にはきみをより自由な場所に立たせることになるだろう。」

(真中智子)

ヤオトンの夜は快適だった。昼間の熱気は日が落ちるとともにどこかに消え去り、用意されていた極薄い夜具を使って眠りに就いた。出発以来の寝不足が解消され、翌朝は気持ちよく目が覚めた。朝食は、かぼちゃの入った粟粥、万頭、馬鈴薯の千切り炒め、ゆでたトウモロコシ等々、この地に相応しいものだった。

8時にヤオトンを出発して、1時間足らずで延川大賓館に到着し、ロビーの片隅で預けた荷物から、今日の一泊に必要なものを取り出し纏める。延川大賓館は、丁度団体のチェックイン真っ最中で、ロビーには人が溢れていた。その片隅を借りて、4人の日本人がスーツケースを開き必要なものを取り出し再度荷造りしたのだが、終始背中に好奇の目を感じて落ち着かなかった。実際、あの人々に我々はどう映ったのだろうか、興味深い。

ホテルを出てから、昨日と同じように小さな川をわたり、急な上り坂を登り平坦な台地に出て暫く走ると、再び道は下り始めた。この間、登りも下りも、道は舗装されておらず、轍のような、或いは水が流れて掘れたようなでこぼこがあって、車は揺れるし、雨が降ったら滑って走れないのではないかと思われるような道を進んだ。今度のくだりは比較的緩やかで黄河に向かって下っているのだが、道は相変わらず悪い。

目的地は伏羲河村。この伏羲河村は、中国の古い八卦を考案したとされる古代中国の人、今で言う哲学者の伏羲が生まれたところと言われている。昨日見た乾坤湾の“乾坤”もこの八卦の記号で両極端を表すもの、つまり“天地”を表現する名前だそうで、確かに昨日の景色は、地球の雄大さを感じさせるものだった。あのような景色を毎日眺めて暮らせば、天地の成り立ち・物事の本質を深く考える人が出てきてもおかしくないと、凡人の理解はそこまでだ。

車は伏羲村の脇を通って、黄河の河畔へ降りて、我々は、黄河の水を真近かに見、触れることが出来た。

この辺りの黄河の流れは比較的緩やかで、水も澄んでいるとはいえないが、岸边では川底の石が見えるほどの透明度はある。透明度は10cm位だろうか。4、5日前に上流で雨が降ったがこの程度だとのことだから、雨のない時はもっと澄んでいるのかも知れない。

しかし岸边の石の多くは、平たい水成岩で、我々が拾って剥がすことの出来るようなもろい石が多くて、一度増水して水に力が加われば、此処からも黄色い水が流れ出す可



けんこんわん
乾坤湾(グーグルアースより)



雄大な黄河の流れ

能性を孕んでいる。黄河の石をお土産にしたいという人がいて、可愛らしい石を捜したけれど、平たくてごつごつした石ばかりで面白みがない。その中で、我々の手の中で薄くはがれた石があったので、これが黄河の石の代表になると、持ち帰ることにした。後は税関で見つからないことを祈ることにする。

この岸边にモーターボートが一艘つないであり、看板が立っていて、‘渡し’が必要な人は電話をするようにと電話番号が書いてあった。昔なら、鐘か太鼓が置いてあるのではないかと思うが、今はこんな所でも携帯電話が使われているのに驚いた。河畔へおりてきた道は突き当たりなので、車は方向転換して、もと来た道に戻り、また頂上の平らな高原に到達した。

◆ 白家塬村・高鳳蓮女士のヤオトン

昨日から何度も車が登ったり下りたりしている道は、元来、川や雨など水による浸食で黄土高原が削られ、低くなった所を人間が道として往来するようになったものだとい

う。浸食され残った黄土高原の表面、平らな所は土偏に原(塬)と書いて(イェンyuán)と読み、ここに多くの人々が畑を耕して生活している。

今日泊めていただくのは、そんな村の一つ白家塬村の中にある、この地方独特の伝統文化“剪紙”の第一人者として名前の知れた、高鳳蓮女士のお宅なので、車は道の両側には畑しかない高原を暫く走った。村と言うのに家は一家も見当たらず、何処まで走るのがかと思っていると、突然、周路さんが畑の脇の細い道を指し示し、車がやっと通れる小道を4～5m下った。道は右に回り込んで車は門をくぐり抜けた。そこは道端で見かけた畑の下に掘られたヤオトンで、7つ8つのお部屋が並んでいた。

昼前に到着する予定だったのに、黄河の河畔でゆっくりし、大分遅れたので、着いたのは1時を過ぎていた。直ぐに案内していただいたのは、やりかけの切り絵が机の上に広げられていたお部屋で、本当にお邪魔して申し訳ないと言う心境だったが、室内は外の暑さを忘れられ快適だった。スイカや瓜を切ってください、文字通り一息つくことが出来た。

暫く休んで、遅い昼食になった。我々の到着が遅れたので、高家の皆さんもお待たせしてしまい、一緒に昼食を頂いた。かぼちゃを入れたお粥や万頭、トウモロコシ等、農産物がたっぷりの食卓だったが、正直、どんな物をいただいたのか余り印象がない。きっと地域色豊かな食事を用意していただいたと感謝している。

食後、各部屋に飾られた剪紙をじっくりと見せていただいた。7つ並んだ部屋の内2部屋は完全な展示室になっていて、高鳳蓮女士とそのお嬢さん劉潔瓊さんの作品と海外での活躍を伝える写真が沢山あった。

食事を頂いた部屋もその半分には作品が展示されてい

た。我々の寝室として提供された所は、普段剪紙の製作に使う部屋のようなが、オンドル式の寝台があって、3人ゆったりと寝られるようになっていた。夥しい作品群をゆっくり見せていただいた後は、部屋に戻って昼寝をすることになった。

部屋の前の庭にはギラギラとした太陽が照りつけているが、部屋の中には暑さは入って来ない。庭の縁には腰ぐらいの高さの石造りの柵があるが、その先には目を遮るものは何も無く、うっすらと緑がかった丘陵が何処までも続いている。縁まで行ってみると、足許から急な斜面が続き、下の方に畑が見える深い谷があり、見ることは出来ないけれどずっと下の方には河があるのだろうと想像できる景色だった。そこから振り返ってみると、ヤオトンの上には畑があって、何種類かの作物が生い茂っていた。この畑も部屋を暑さから護るのに一役買っているらしい。

ヤオトンの前には水道の蛇口があって、畑にはそこから長いホースで上に上げて水を撒いているそうだ。水は河からポンプで汲み上げているようだ。貴重な水だから、我々が手や顔を洗った水も、バケツに溜めておいて、庭の一角にブロックで囲いをして花やトマト・ナスなどを植えた菜園花壇に撒いていた。

高家の畑を見て分かったことは、道中、一軒の家も見かけ

なかったのは、我々が走っている道路際の畑の下に家があるので、我々の目には見えなかったためだ。時々、崖下に家があるような絵を描いた三角の交通標識を見かけたが、あれは道路下にヤオトンがあるとの標識だったので。

午後一杯ゆっくり昼寝をして夕方から散歩に行くことになったが、私は珍しく、本当に珍しく発熱したようで身体の節々が痛いので、出かけることを断念、部屋で昼寝の続きを楽しんだ。散歩から帰った皆の話を聞くと、☒の端まで行って見た夕陽に映える景色は、アメリカ西部のグランド



高家の門 高家は '高鳳蓮藝術館' でもある



高鳳蓮家の前庭



高鳳蓮夫妻

キャニオンを彷彿させるような、それでいて緑もしっかりと点在して、雄大で親しみを感じるようなものだったようだ。実際に見ることが出来なかったのは本当に残念だった。

夕食の前に、お嬢さんの劉さんが赤い紙を5枚重ねて鉄を入れ始めた。一部を二つ折りにして切り取り、別の部分では紙を動かしながら大きく鉄を入れて、剪紙の作品を作り始めた。流れるような動作が15分程続くと、“出来上がり”と言って白い紙の上に広げた。何とそれは、中国の図柄で良く見かける、額に“王”の字を戴いた虎だった。虎は虎でも、身体に花の模様が付き、目が大きく、身体が丸っこい猫のように可愛いもので、どうやらこれは、剪紙の伝統的なパターンのようなのだ。出来上がったものを我々4人に1枚ずつくださった。目の前で作品が出来る所を見るだけでもラッキーなのに、その作品を頂けるなんて、思いもなかったことで、本当に嬉しかった。

夕食には、手打ち麺をたっぷりの野菜と一緒に煮た、美味しい麺(うどん)を、庭に据え付けられた石のテーブルで頂いた。とても美味しい麺で、一杯、汁ごとすっかり平らげてしまった。食べたから治ったのか、治ったから食べられたのか、いずれにしても、私の熱はどこかへ飛んで行ってしまっていた。

夕食後、寝る支度をしながら、ふと空を見上げると、思いがけず多くの星が目に入って来た。昔々にこんな星空を見たような気がするが、最近では思い出したように夜空を見上げて決して見る事が出来ない、満天の星空だった。余りに綺麗なので、このまま寝てしまうのは勿体ないと、暫し星を眺めることにした。上の道から門へ降りてくる小道の脇の斜面に身体を預けて、楽に空が眺められる姿勢をとった。詩人や哲学者なら、美しい詩を編み出し、悠遠な宇宙に心を遊ばせるのだろうが、我々は、唯唯心を空っぽにして飽きずに眺めているだけだった。

◆ 民族文化村

翌日はゆっくり起きて、高鳳蓮女士のお宅を出発したのは、もう10時近かった。昨日とは違う道だが、登りと同じようにでこぼこの下り坂で、道幅は車の幅ギリギリ、若し対向車があったらどうするのかと心配になったが、道中他の車を見かけることは無かった。

延川の町には昼前に到着した。荷物を置いてあった延川大賓館は、大きな団体が宿泊していて部屋がなく、金橋賓館というホテルに泊まることになり、荷物は後から運んでもらうことになり、身一つでチェックインした。屋に近かったのでまず昼食をとることになり、ホテル近くの食堂に入った。町の人たちが利用する簡単な店で、ちぎり麺を食べた。テーブルが7つほどしかない店の一番奥のテーブルでその麺を作っていたので見せて貰うと、刀削麺を作る時のように纏めた塊から、手でちぎって楕円形の花びらのよう

な麺を生み出していたが、そのスピードに熟練の技を見た。

恒例になった昼寝をした後、6時過ぎ、隣村にある民族文化村へ連れて行って貰った。“民族文化村”と言っても、6cmほどの角材に墨で名前を書いたものが立っているだけの所で、車が止まったのは、空堀のような溝に小さな橋が架かった道端の空き地だった。橋には“曹家橋”と名前が彫ってあり、その脇から草深い山道を10mほど登ると、門柱があり、その足許両側に石の太鼓のようだが崩れてハッキリしないものがある、昔は格式のある屋敷だったらしい事を示していた。

これが曹家の門なのだろう。門を抜けると左手の山肌、ヤオトンのような小さな建物の跡があり、昔は確かに格子戸があったようだが、既に半分壊れ、穴自体も崩れかけていて、その前にある石積みの囲いが妙にキッパリと残っていた。右手は少し低くなり斜面に建物の跡があるが、どんな建物だったのかももう分からない。更に上ると、前庭を持ったヤオトンが現れた。かなり立派な構えのものだが、随分荒れている。しかし、まだ人が住んでいて、小柄な老婦人が出てきて我々に笑顔を向けてくれた。ヤオトンの中に入る許可をくれたので、ちょっと覗かせていただいた。

造りは我々が泊まったヤオトンと殆ど同じだが、並んだ夜具や調理器具が生活の臭いを感じさせてくれた。水瓶から水を汲んでご馳走して下さろうとするが、貴重な水だし、我々も水を携えているので丁寧にお断りすると、小さな青りんごを持って行けと言う。あまり熱心に言って下さるので、一つだけいただいた。聞けば、この老婦人は脚が不自由なご主人と一緒に此処に住んでいて、町に住んでいる子供さん達が毎日水汲み等の手伝いに来ていたとのことだった。

母屋のヤオトンと直角になるように、半分崩れかけた納屋のようなものがあり、その建物には外階段が付いていて、二階にいけるようになっている。二階は10畳程の広さがあり、窓枠には木の柵が埋め込まれていて、座敷牢を思わせる雰囲気だ。昔の格式ある家柄の家庭では、嫁入り前の娘さんはこのような部屋に入れられ、外界との繋がりを絶たれ、僅かに窓から外をのぞくことしか許されなかったと話には聞いていたけれど、朽ちているとは言え、実際の部屋を見ると不思議な感じがした。このような部屋を持つこの家は、格式のある家柄だったのだろうが、現在の荒廃ぶりが一層強く感じられる。

しかもこの家、建てられてからまだ百年ほどしか経っていないのだそうだ。見ただけの印象では2～300年も前の建築のように思ったが、実際には清朝末期から民国の時期に建てられたものだそうだ。この百年は、中国にとって未曾有の激動の時代だからかもしれないが、この著しい荒廃ぶりは、やはり黄土高原地帯という特殊な風土が関係しているかと考えた。

(次号に続く)

第2回漢詩の会に参加して

期待通り殷さんの朗読する“垓下歌”は素晴らしい！の一言に尽きる。京劇“霸王別姫”の舞台そのままに目の前で聴けたときには、“好！”という声もかかった。そして、その日みんなと一緒に声をだして読んだ漢詩も“垓下歌”だった。殷さんの朗読とは程遠いものだが、なぜか四句の“虞兮虞兮奈若何”が耳に残り今でも口をついて出てくる。

1回目に比べると馴染みの漢詩が少なく、目はどうしても資料の文字にいてしまいがちだが、1回目が終わったときに主催者側のひとりに、「文字面だけを追っているなんてもったいない。こんな間近で京劇の俳優さんの漢詩が聴けるのだから、顔の表情や手の動きを見ていたほうがずっといいのに…」と言われた。だから今回はそうしようと思った。

殷さんの朗読は録音しておけば後で聴ける。詩の内容は読み下し文があればそこそこ理解できる。一緒に読むためにはピンインがあるといい。参加者全員が中国語の学習者ではないのだから、読みの練習にもう少し時間をかけてもよいのでは…。

気になったことは、一回ごとに殷さん自身が席を立てて機器を操作していたが、漢詩の朗読に音楽が必須ならば、音楽担当者が別にいたほうが良いと思う。

それぞれの漢詩の説明のなかで対句や押韻のことを話されたが、押韻は中国語で読まなければわからないことなので、今回なるほどと納得した。

この漢詩の会をこれからも続けていくにあたって、主催者側もいろいろ考えがあるだろうが、参加者側としては、

- ①事前に送られてきた資料の読み下し文に1回は目を通して内容をおぼろげながらも理解しておく。(インターネットで“漢詩の世界”を検索すればさらに内容は理解できる)
- ②当日は録音機を持ち込んで講師の朗読を録音する。朗読中は資料は見ないで朗読者の表情や手の動きに注目して聴く。
- ③みんなと一緒に読むときは、資料のピンインを頼りに講師の読みを真似る。
- ④後日録音しておいた朗読をBGMを聞くように流してみる。(清々しい気分になるはず…)これが“漢詩の会を2倍楽しむ法”だ。

①は省略して②だけでも十分に漢詩の会は楽しめる。実は私もまだ②と③だけなのだ。

(木之内記)



教室風景



京劇の振りで“垓下歌”を唱う殷秋瑞さん

玄宗皇帝と楊貴妃の愛と別れの物語“長恨歌”を表情豊かに切々と読む



2009年9月から今年7月までの1年間福建省福州にある福州外語外貿学院という大学で日本語を教える機会がありました。福建省といってもあまり知らない読者がいるかもしれませんが、日本との関わりが強いところ。たとえば、日本への出稼ぎが一番多い省であることや唐時代に日本からの留学生や僧侶(例えば、空海)がここから上陸して長安(今の西安)に向かったことなどよく知られています。また室町時代日本の海賊集団の倭寇がこの近辺の海を荒し回っていたことも、沖縄の人々が交易などで福建の町や村を訪れて、あちこちにその足跡を残していることなども興味あることです。

さて、これから何回かにわたって、私が福建省(主として、福州になります)で見聞したことをレポートしたいと思います。第1回目として、今回はまず中国人の結婚事情といったものを書いてみましょう。

中国では結婚は恋愛結婚と見合い結婚のどちらが多いのかよくわかりませんが、いずれにしても日本と同じように結婚相手を見つけるのは大変なようです。結婚年齢も高くなっています。その表れとして、集団お見合いパーティなるものがあります。偶然福州でその場に遭遇したことがあります。福州に来てまだ間もない10月のある日曜日の午後左海公園という公園に散歩に出かけました。その時公園の一角で何やら若い男女がたくさん集まっているのに気が付きました。一体何が行われているのか興味を感じ、しばらく見学してみました。

入口に「軍地相親会」という看板が出ていて、あ、これは軍人さんのためのお見合いパーティなのだとなりました。会場内に入るとすでに大勢の人がいて、その人込みの中に軍服を着た男性が大勢いました。海軍と陸軍の両方いるようでした。もちろん彼らの両親たちも来ています。会場をざっと一巡すると、建物や樹木にたくさ

んA4版くらいの紙がぶら下がっています。何だろうと思ってよく見ますと、それらは結婚相手を求める女性側のチラシでした。そこには、年齢、学歴、職業、性格、収入、相手側への希望、連絡先等詳しく書いてあります。どのチラシも大なり小なりみな同じようですが、それらを参加者たちは熱心に見たり、携帯に撮ったりしていました。

別なところでは、1人の軍人を囲んで何人もの女性が話し込んでいる光景も見られます。一方では同性だけで固まって話し込んでいるところもありますが、最終的にはこうしたグループの方は進展がないようでした。

お互いにうまく話が進んでいくと、成立したカップルには特別席が設けられていて、最後に参加者一同に紹介されるようでした。この日はどのくらいのカップルが成立したのかわかりませんが(実は、最後までいませんでしたので)、参加者は男女ともかなり高学歴の人が多かったです。このような集団お見合いは福州だけでなく各地で行われており、旅行でいろいろな地方を訪れた際も何度か目にしました。

お見合いパーティの近くでは、もう一つ興味ある光景を目にしました。それは結婚情報交換会とでもいうようなものようで近くで開かれていました。どんなものかという、結婚相手を求めて当人たち(実際はその両親がほとんどだったような気がします)や親たちが情報を求めて三々五々集まって来ているようでした。みんな結婚相手を求めるチラシやベンチの上に置かれた情報の書かれた紙の束などを熱心に見ています。ここは毎日曜日に開かれているようです。目にした1枚のチラシには、次のように書かれています。ご覧になってどう思われますか。

某女 1982.8.18生まれ。
身長162 cm。大学本科卒。仕事は経理関係。
端正眉清目秀。4人家族、妹あり。
父は退休。家あり。
求む男性は身長172 cm以上。大卒。公務員。
五官端正。福州在住。
連絡先：136・・・・ 氏名：鄭・



中国では結婚式を教会で行う人も多いです。日曜日教会に行くと、午後しばしば結婚式があることに気が付きます。教会で式を挙げることは都会の若い人々の間で大変ブームになっています。一体どんな式が行われるか見

てみたいと思っていたところ、11月のある日曜日、その機会がありました。結婚式があったのはプロテスタントの教会で、かなり大きなところでした。500人以上は収容できるほどで、その式の時には300人くらいの出席者があったでしょう。

式そのものは日本で行われているキリスト教式のそれとほとんど変わりません。花嫁のウェディングドレス姿、指輪の交換、牧師の結婚に関するメッセージ等々同じです。ただ私が見た感じでは、うわべだけを取り入れて、キリスト教的な本質とはかけ離れているのではないだろうかと感じました。しかしながら、ともあれ変わりつつある中国の今の姿を知る意味で、今回の経験は大変有意義であったと思います。



チラシを熱心に見ている親や家族たち



結婚を求める男女の情報掲載の小冊子
(青は男性、ピンクは女性)



結婚相手を求めるチラシを携帯電話で
メモしている海軍兵士



話の進んでいるグループ



教会での結婚式。新郎新婦の入場



結婚情報会・会場の様子



式の最中、新郎が携帯電話を手にして、メールのチェックでもしているのでしょうか

今回はポロナルワを紹介させて頂きました。今回は石窟寺院として有名なダンブーラを紹介する予定でしたが、それに代えて最近あった面白い旅行の話をする事にします。

9月25～26日にスリランカ人6名、アメリカ人(日系3世)1名と日本人2名で長野県川上村にある町田市自然休暇村のキャビンに出かけました。事の発端は、スリランカ人が集まって、一緒にスリランカ料理を食べ、お酒を呑んで、歌を歌ったりダンスを踊れる場所はないかと相談された事です。7,8年前に町田市民フォーラムの調理室と和室を借りて同じ様な事をした事がありました。当時は今と違ってお酒に関してあまりうるさくなかったのですが、最近はお酒は厳禁になってしまいました。公民館や芹が谷公園内の施設等に当たってみました。どこも同じ様な状況でした。

そこで思いついたのが、自然休暇村です。ここは何度か利用した事があるので、宿泊棟の他に少し離れた場所にキャビンがあるので思い出したのです。ここなら、キッチンもあり炊事道具や食器類も用意されています。隣接するキャビンとも離れているので多少は騒いでも他の宿泊客に迷惑を掛ける事は無いでしょう。あとはとんとん拍子に話が進んで、日程が決まりました。

さて出発日の25日です。日本人・アメリカ人チーム(以下Nチーム)は町田に集合、スリランカ人チーム(以下Sチーム)とは中央高速の双葉SAで11時30分に合流する予定です。Nチームは11時少し前に到着しましたが、やはり問題はSチームでした。11時15分頃に電話あり、石川PAを通過したので、あと20分くらいで着くという連絡でした。石川PAは八王子料金所の手前で、双葉SAまでは約100kmあります。単純計算では平均時速100kmで走っても1時間かかる距離なのですが、20分で着くと言いつつところが凄いですね。

後で聞いた話では、Sチームの幹事は待ち合わせ時間を11時30分と伝えると必ず遅刻するので、11時と早めの時間を伝えていたそうです。恐るべしスリランカ人、今回参加した人は10年以上日本に住んでいるにも拘わらず、時間感覚がいまだにスリランカ時間のようです。電話があった時点でNチームは早めに昼食を摂って、気長に待つ事にしました。昼食後、ハーブ園を散策したりして時間を潰しているうちに、ようやく12時20分にSチームが到着しました。そして、何事も無かったように



清里の清泉寮ファームハウス前での食事

「さあ、行きましょう」

「昼食を用意してきたので、景色の綺麗なところに連れて行って下さい」

などと言ってきます。これぐらいで怒ってはスリランカ人とは付き合えません、僕たちの分まで昼食を用意して来たりして、気のいい人たちなのです。

長坂インターチェンジで高速を下り、八ヶ岳が一望できる橋の上で記念撮影をしたりしながら、14時少し前に清里の清泉寮ファームハウスに到着しました。お待ちかねの昼食です。ファームハウス前に広がる真っ青な牧草地、真っ白なフェンス、そして木造の机とベンチ、なんとも牧歌的な雰囲気です。絵葉書に書かれている様に綺麗な場所でした。

Sチームの車から鍋やプラスチックケースに詰め込まれたスリランカ料理が次々に運び出され、机の上に並べられます。スパイシーなチキンカレー、カツレツ(円球のコロッケの様な食べ物)、ロティ(カレーペーストをはさんで焼いたパンケーキの様な食べ物)、ポルサンボル(スリランカ風のフリカケ)などです。もちろんスリランカのライオンビールもありました。1時間ほど食事とファームハウス周辺の散策を楽しんだ後、自然休暇村に出発しました。約1時間ほどのドライブです。

川上村で唯一のスーパーマーケットに立ち寄って、野菜とアルコール類を調達し、自然休暇村には16時頃に到着しました。キャビンに入ると、Sチームは直ちに夕食の用意を始め、Nチームは椅子を並べたりしましたが、他にはする事も無いので大浴場でノンビリです。

夕食は19時ごろに始まりました。昼食のメニューに野

菜カレー、ビーフカレー、ダール(ひよこ豆)カレー、鶏腿肉のスパイシー焼き等が加わって大変な量です。料理を食べお酒を呑んでいるうちにSチームが、次は外で焚き火をしたいと言い出しました。キャビンの直ぐ傍に野外炊事場があったので、そのバーベキュー用の暖炉で焚き火をしながら宴会の続きです。

スリランカのタブラーと呼ばれる小さな太鼓を持ち出して念願の唄を歌ったり踊ったりする事が出来ました。困った事に酔いが増すに連れて、誰かしらが太い薪をどこからか探し出してきて焚き火に足します。火が大きくなって暖炉からあふれ、野外炊事場の屋根に火の粉がかかる様になってきました。時間は23時になっていたのです、お開きのタイミングです。Sチームからは、まだ宴会は始まったばかりだ、朝まで焚き火を続けたいと不満の声が上がりましたが強引に焚き火に水をかけました。あのまま続けていたら、本当に朝まで続けて野外炊事場ごと燃やしていたかもしれませんね。それぐらい火の勢いは強くなっていました。

何とか朝になり、Nチームは朝風呂に入り、帰りの準備をはじめました。Sチームにもチェックアウトは10時という事を伝えてあったのです

が、別棟のキャビンから起きてきたのが9時少し前です。昨夜はキャビンに戻ってから呑み続けたようです。それから本館でお風呂に入って帰ってきたのが9時45分ぐらいでした。幹事さんが、フロントと交渉してチェックアウトを1時間遅らせてもらったと嬉しそうに報告してきました。

朝食もスリランカ式で、大量に余った昨夜のご馳走と、新たに調理したカレー味のビーフン炒めです。昨夜の料理が大量にあまっているにも拘わらず、ビーフン炒めも大鍋一杯分ありました。Sチームの荷物には、食卓に出なかったチキン丸焼きやらカツレツ、ロティが段ボール箱に入って、まだまだ大量に残っています。いったい何人分用意してきたのでしょうか。昨日から3食、スリランカ料理を食べ続け、美味しかったのでついつい食べ過ぎ呑み過ぎで、何かカロリー食べてしまったのか怖いです。

朝食も終わり、掃除と後片付けをしてチェックアウトしたのは12時少し前です。休暇村職員の方にはすっかり迷



町田市自然休暇村近くの、野辺山・宇宙電波観測所

惑を掛けてしまいました。帰り道で驚いた事に、Sチームから野辺山の宇宙電波観測所を見学したいと申し出がありました。

川上村には何度も来た事があり、途中の野辺山に大きな望遠鏡がある事は知っていましたが、ここに入れるとは知りませんでした。どうしてスリランカ人は知っていたの

でしょう。観測所の構内では、ほとんどの施設を外部から見る事が出来ます。特に45m電波望遠鏡は迫力があり、お薦めの場所です。

宇宙電波観測所を出て、もう1箇所「萌木の村」に寄りました。しかし、Sチームは疲れてしまったのでしょうか、2人しか車から出てきません。ハロウインの飾り付けが綺麗でしたが、此



町田市自然休暇村キャビンの前で

処は早々に引き上げる事にしました。そして、この場所で解散して各々のチームがバラバラに帰途に付いたのですが、途中のコンビニで出会ったり、連休で渋滞中の高速道路上で追い付いたり、追い越されたりしながら、最後まで仲良く旅行をする事ができました。Sチームの皆さん、Nチームの皆さんありがとうございました。また、やりましょう。(写真：松本 悟)

▲次回は世界遺産シリーズに戻ります。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。



マサイ族は日本で有名な民族の一つだ。現代も伝統的な生活様式を守り、赤い布をまといサバンナを盾と槍も持って、国境を意識せずさすらう民として知られている。私もケニアに行く前は、「マサイ族はケニアにもいるのか。是非サバンナで会ってみたい」と内心思っていた。ケニアに行く前に唯一イメージのあった民族、それがマサイ族だった。

ケニアには52もの民族が住んでいる。人口3,800万人の21%を占めるキクユ族、14%のルヒヤ族、13%のルオー族、11%のカンバ族、11%のカレン人種が主要5民族で、それ以外の47民族は10%以下の少数民族となっている。マサイ族は、ケニア・タンザニアの国境付近を主に牧畜しながら移動する民族で、23万人ほどではないかと推測されている。

私の寝泊りしていた孤児院は日本人スタッフ1名のほかはすべてケニア人スタッフだった。校長先生はキクユ族、保育士さんはキクユ族、秘書さんはマサイ族、寮母さんはキシー族、警備員はマサイ族という構成だった。孤児院のあった町は、もとはマサイ族の放牧地であったが、少しずつマサイ族が土地を切り売りしていった、商業地となり住宅地となり、サバンナから町としての原型が出来上がっていった。首都・ナイロビもももとはマサイ族の土地で、マサイ語で、「冷たい水」という意味だそう。他の場所の名前でもマサイの名前が付いているところは、マサイ族の土地だった名残りだ。

孤児院から30分も歩けば、今でも伝統的な暮らしを続けるマサイ族が多くいる場所に着くが、首都ナイロビはケニア国内各地から仕事を求めてやってくる人たちのベッドタウンとなっていた。そのため、ナイロビはマサイの土地ではあったけれど、さまざまな民族が入り混じって生活をして、それぞれの民族はそれぞれの部族語を話す為、会話はスワヒリ語や公用語の英語がよく使われていた。その中でも圧倒的に多いのが、キクユ族出身の人たちだ。キクユ族は農耕民族で、中央ケニアと呼ばれるナイロビを含む白人入植者が大規模農園を展開したエリアに多く住んでいた。そのため独立する為に白人と戦い、その戦士たちはマウマウと呼ばれ、今でも英雄だ。最大部族としての誇りがそこにはある。

私の夫もキクユ族である。キクユ族は、農村で生活するため共同体の意識がとても強い。商売が得意な彼らは、農村を離れ、どんどん都市部へと進出し、政界・財界の

あらゆるところでリーダーシップを取っている。そんな彼らがマサイをさして言う言葉は下記のようなのだ。

「君の考えはまるでマサイだ！（＝直感で何の根拠もないの意味らしい）」

「そんな態度なら、牛のおしりを追いかければいいじゃないか（＝君はビジネスに向いてない）」

等々、これらの言葉にはマサイ族のことをそういう風に見る傾向がたまにあるということだ。

伝統的なマサイの生活様式は、近代化するケニアの国家政策に合わない面もある。子供に義務教育を受けさせない、女子教育への差別など。加えて女子の割礼や野生動物のいる国立公園への立ち入りなど。

しかし、マサイにとって牛が財産であることは今も昔も変わっていないにしても、教育へ投資したり、ビジネスをしたり、土地を売ったりして、どんどん資本主義貨幣経済へ入っていくマサイ族もいる。また観光客を相手に、家を見せたり踊ったりして、外貨を稼ぐ観光マサイという職業もある。私の知るマサイのビジネスマンは、週日はナイロビで会社を経営し、週末は放牧のために村に帰る。起業する前は、マサイの戦士として生活していたと言っていた。耳に大きな穴を開ける習慣のあるマサイの男性。その穴とその話を聞くまでは彼がマサイの戦士だったとは想像できなかった。

ナマンガというケニア・タンザニアの国境の町へ小旅行したときのことを思い出す。私はケニア側にいて、パスポートを提示し、入国許可を得る為にお金を払い、出国と入国のスタンプをもらった。国境といってもフェンスだ。そのフェンスもどこまでも続いているわけでもなく、あるところから途切れていた。そのフェンスの切れるあたりを赤い衣装を着たマサイ族が牛を追ってゆっくりと国境を越えていく。国境を素足で、牛を追いながら毎日行ったり来たりしている。

ナイロビでビジネスに明け暮れる元戦士のマサイ。

孤児院で、警備の仕事をするマサイ。

国境を素足で放牧するマサイ。

どれも今のケニアを映し出すマサイの姿だ。

どこで彼らを見るかによってマサイの印象も変わるだろう。私の印象は、孤児院の子供が熱を出したとき、何も見えないような、まっ暗闇を、子供を抱えて病院へ運んでいったそのうしろ姿だ。その赤い衣装の下に伸びる細く長い足が、闇の中へ進んでいく、「勇敢」なその姿だ。

翌朝、私は再び北京軍団の車に乗り込み、シャアムウに見送られて稲城の街を出発した。石頭はあれ以来私に対して気味悪い思いを抱えているらしいし、彼等と私の旅のスタイルはちょっと違っているのをお互い薄々感じていたので、稲城に到着してから北京軍団とはずっと別行動していたのだが、前回の稲城で知り合った上海小姐がバスケットの購入に苦労していた事や、残り少ない中国元の懐事情を思うと、このまま彼らの車で次の目的地である理塘まで運んでもらえるのは大変に有り難く、すっかり再び便乗させて貰ったのだ。

名残惜しいシャアムウにお別れをして「またきつと稲城に来るからね」と言う私に、稲城には働きに来ているだけで、本当は丹巴^{たんぱ}という土地の出身なのだと言ったシャアムウの言葉を聞き、なるほど！と妙に納得した。丁度この一人旅に乗り出す前に、当初の旅行メンバーと観光で訪れていた丹巴は風光明媚な景色を誇る土地も大層美しかったが、別名「美人谷」とも異名をとるほどに美人が多い事でも名高い土地なのだそう。

漆黒の艶やかな髪を長くのばし、ふっくらした色白の肌にバラ色の頬ときりっとした切れ長の瞳のシャアムウは、確かにとても美しい。

いずれ丹巴に戻るので稲城にはそう長くは居ないつもりだという彼女に「丹巴の住所を書いてくれる？」と手帳を差し出すと、シャアムウは戸惑ったような顔をして受け取ろうとせず、口ごもりながら自分はあまり字が書けないのだと言った。「じゃあせめて名前だけでも」と押し付けるように手帳を渡すと、恥ずかしいから嫌だとキアキア言いながらも手帳の片隅に小さな字で「夏姆」と書いてくれた。彼女はチベット族なので漢字はチベット語の音に当て字しただけなのかもしれないが、ちょっとりぢい字で書かれたその名前を見た瞬間、それまでカタカナでしか思い浮かばなかった名前に意味が添えられたような気がして、私は手元に戻ってきた手帳に書かれた文字を新鮮な想いで見つめた。

本音をいえばまだ稲城を出たくなかった。亜丁村を出る時にもそうとうな寂しさを感じていたが、広義では亜丁が属している土地となる稲城を出るのはそれ以上に辛かった。一人旅の孤独な気持ちの隙間を温かく埋めてくれるシャアムウやリ・ルー・ハイの居るこの街に、もっと滞在したい気持ちは強かったが、彼らにしてみればここでの生活が彼らの現実であり、そうそう旅人の感傷に付き合っている暇などないだろう。私に与えられた中国ビサの期限も手持ちの中国元も徐々に残り少な

くなっていた。旅というのは結局出会いと別れの繰り返しのものだ。あと数日出発を延ばしたところで辛い気持ちになるのは同じ事だ。

「小姐、一緒に行くのかい？ 行くなら早く乗ってくれ」北京軍団に促されて私が慌てて車に乗り込むと、この土地に対して特に何の想いも抱いていないであろう彼らの車はあっさりと稲城の街を出発した。小さくなるシャアムウに手を振りながら、私はそれこそ胸が締め付けられるほどの寂しさを感じていた。

窓の外を流れて行く景色が、ついにこの旅が折り返し地点を過ぎ後は帰路に向かうのだと否応無く告げている。

抜けるように晴れ渡った青い空の下に広がる風景を眺めながら、私は北京軍団に気づかれない様にそっと目尻を拭った。

稲城の街を出て暫く走った頃、ぼんやりと見つめていた窓の外に広がる景色の中に、大きな岩壁を背負うようにして山の斜面に立てられた寺院らしきものが見えてきた。中心に建てられた本堂と思われる建物の周りを宿坊らしい小さな建物がびっしりと取り囲み、背後の大岩壁と相まってまるで要塞のように見える。

うわぁ！あれは何だろう～？私はこのあたりの土地についての予備知識が無い為に知らなかったが、どうやら有名なお寺らしい。車を走らせ自由に好きな場所を訪れながら旅をしている北京軍団は観光に立ち寄る事を決めていたらしく、興味を惹かれている私の心中を察したかの様に車は走っていた道路をそれでお寺の方向に進路を向けた。

門の前に来て見ると、やはり歴史のありそうな立派な寺院だ。5階建て(?)ほどの造りになっている寺院の内部には本殿の他にも小さな部屋がたくさんあり、それぞれの部屋に仏像が置かれていたり僧侶が坐っていたりした。

高僧となるとそれぞれがお寺の中に自分の部屋を持っているらしい。私達は寺院の中の階段や廊下を登ったり下りたりしながら、そんな高僧の部屋を渡り歩いてお参りしたり、僧侶に何やらお守りのような意味が込められているらしいコヨリのようなものを頂いたりしたが、見ていると北京軍団は一人一人のお坊さんにそれぞれ100元紙幣をお布施として差し出している。

ええ～～～!?でも、それって随分多いんじゃないの～?中国人としての金銭感覚は、単なる旅行者の私にはいまひとつピンとこないが、それにしても私がこの旅で

泊まっている安宿は概ね一泊20元から30元の間くらいだったし、成都から一日走り続けて辿り着く康定までのバス代は125元だし、稲城で知り合った中国人の旅行者達と食事した時に聞いた話では、中国での一般的なOLの月給はおおよそ2000元くらいとの事だった。

何といっても、日本円で1万円を両替すると当時のレートで650元くらいだった筈だ。100元といえおおよそ1500円。日本円に換算してもお賽銭としては結構な額と思えるが、それも一回だけではなくそれぞれが何人もの僧侶に会う度にだ。

そういえば車も高級そうなランドクルーザーだし、この人達はお金持ちなんだなあ・・・他人のお賽銭額にあれこれ思うなんて下世話な話だが、シミシミとサイフの残金を気にしながら細々と旅を続けている貧乏旅行者の私としてはため息がでる思いだ。すると北京軍団の一人が寺院内の廊下を歩きながら「こんなに坊主がいると賽銭額がかさんで、たまんねえな」と愚痴をこぼしている会話が聞こえてきた。

別にお寺に強要されているわけでも無し、嫌なら払わなきゃいいのに・・・そんな気前の良いお布施が効いたのかどうかは知らないが、私達が寺院の内部をお参りし終わった頃、ある部屋の僧侶に命じられて剃髪の頭も青々しい、可愛い少年僧侶がニコニコしながら白い粉の入ったバケツを持って現われた。

いったい何が始まるのだろうか、先を歩いて行く少年僧や北京軍団の後について寺院の外に出て行くと、庭先の奥の方には池(川?)があった。少年僧は粉の入ったバケツに池の水を入れるとオレンジ色の僧衣の袖を捲った腕をグルグル回して捏ね始め、いくつかのお団子を作ると私達に配ってくれた。

何これ？ 私は意味が解らずに北京軍団のメンバーを見ていると、皆は配られたお団子を小さくちぎって池に投げ入れている。すると、池の中にいた魚が集まってきて奪い合うように投入されたお団子をピチピチピチピチッと食べ始めた。

「ほら、小姐もこうやって！」

ピチピチピチピチピチ・・・

何じゃこりゃ～！こんな事なら何もお寺で有り難がってやらなくても、日本の公園でだって何度もやった事あるぞ～！とは思ったものの、魚が口を開けて集まってくる様子はやはり結構面白い。途中で飽きてしまったらしい北京メンバーの粉団子まで譲り受けて、一番楽しみながら餌まきをしていたのはきっと私だ。

つまりこれは自然動物に食べ物や施すことで功德を積むという、仏教的な考えに基づく行いなのだろうと思われた。

私が2年ほど暮らしていたタイでは、お寺で小さな籠に入れられた小鳥が売られているのをよく見かけた。初めは飼うために売られているのかと思っていたが、それは大間違いで、小鳥は買って籠から放してやるために売られているのだ。タイの仏教的な考え方では現世で功德を積んだ者が来世で幸福を得ると信じられているために、来世の幸せを願いお金を払って功德を買うという訳だ。しかし、それでは功德を商売として売っている小鳥屋の方は常に逃がすための小鳥を捕まえて籠にとじこめなければならない訳で、それを生業にしている人物の来世は随分心配ではないか。

そんな事を考えながら池の魚に粉団子を撒いているうちに、私の手元にあったお団子も無くなってしまった。

私達を池まで案内してくれた笑顔の可愛い少年僧に年齢を尋ねると、13歳という事だった。私が3年前に出会った時の亜丁の少年と同じ歳だ。そういえば、赤い頬やちょっとはにかんだような笑顔など、ちょっとびり当時の彼に面影が似ているようにも思えた。

「あなたの家族はどこに住んでるの？」

「いつからこのお寺に来ているの？」

何気ない世間話のつもりで少年に話しかけていた私が

「あなたはいつまで此処にいるの？」

と尋ねると、それまでニコニコと私の質問に答えていた歳若い少年僧は、ちょっと困ったような顔をして答えに詰っていた。私の中国語が下手な為に意味が通じていないのかと思い、改めて

「あなたはいつ自分の家に帰るの？」

と尋ねなおすと、そばに居た北京軍団の一人が私に言った。

「彼は帰らないんだよ」

「え？」

「彼は自分の家を出て僧になったんだ。一生寺で暮らすんだよ」

「ええ!?・・・」

私は思わずまだ歳若い少年僧の顔を見つめ直した。私の暮らしていたタイでは、男子は成人すると一生のうち一度は出家するという習慣がある。詳しく確かめた事は無いが近年のタイにおけるその習慣は、どちらかといえば親がわが子を出家させ神様に寄与する事で功德を積むための儀式的な要素が強いようで、本来の僧侶となる為に出家する事とはだいぶ意味合いが異なるようだ。

実際に「出家するのは親孝行の為だ」とタイの友人が語るのを聞いた事もあった。それ故忙しい現代では学校や仕事の休みの合間を縫って髪と眉をそり落とし「1週

間だけ出家してきた」などと坊主頭に帽子を被ってあっという間に世俗に舞い戻ってくるインスタント出家が一般的になりつつあるようだ。

仏教的な信仰心がとても厚いとされているタイだが、小鳥の件といい出家の習慣といい、どうも物事がドライに形式的に簡略化されすぎているような気がして、他国の習慣にケチをつけるつもりはなくとも「そんなので功德が積めるの?」と疑問に感じない事もない。

勿論このチベットエリアでそんなインスタント出家が行われていると考えていた訳ではないが、まだまだ幼い面影の残る少年と、家族と別れ俗界から切り離された山寺で一生暮らしていく人生が既に定められているという事実が即座には結びつかず、私は少なからず衝撃を受けてしまった。

「貧しくて子供を養いきれない家は、子供を出家させるんだ。子供だってその方がちゃんと毎日食事でも食べられるし学問を学ぶ事もできるからいいのさ」

それは北京軍団の一人が私に言った言葉で、事実なのかどうか私には判らない。しかし亜丁のように観光で比較的容易に大きな収入を得る事のできる特殊な村を除き、中国の最奥とも言える山間部での村の暮らしは、やはり楽ではないように思われた。少年僧の全てがそうだとは思わないが、確かにそんな事もあるのかもしれない。

だけど……。目の前にいる少年僧は、まだまだ遊びたい盛りの子供と言っているような年頃だ。こんな少年が家族から一人離れ、この先の人生をお寺の中の閉ざされた世界だけで暮らしていくの? 三年前この少年僧侶と同じ年齢だった亜丁の少年が、自由に野山を駆け回って遊んでいた事や友人らと稲城の学校に通っていた事、現在では故郷の村から成都という都会に出て生活し学んでいる事を思うと、私は微かに胸が苦しくなるような気持ちになったのだが、私の前に立っている少年僧の笑顔はとても明るく、家族と別れて暮らす寂しさの影のようなものは全く感じられなかった。

どのような経緯でこの寺に暮らすようになったのかは知らないが、きっと先輩の僧侶達に可愛がられながら仏教を学び、幸せに暮らしているのだろう。何が良いとか悪いとかでは無く、人の人生には本当に色々な形があるんだな……。と、これまでに経験した事も無いほど深く感じて言葉が出なかった。

この少年僧がこれからどのように立派な僧侶として成長していくのか、いつかまた機会があれば彼を訪ねてみたいような気持ちになり、いつもズボンのポケットにいられている手帳を取り出して彼の名前を書いて貰った。

何年後になるのか判らないが、いつの日か再びあの寺

院を訪れたら、手帳に記された剛瑪亞熱(ガンマヤルア)という彼の名前をたよりにこの日の小年僧を捜し当てられるだろうか?

北京軍団の車に乗せて貰っていたお陰で立ち寄る事のできたこのお寺は、街や村から離れた場所にあるためにマイカーやツアーで来ているのでない限り、訪れるのは難しい場所のように思えた。稲城から普通に長距離バスに乗っていたとしたら、きっと私が居眠りしている間に通り過ぎ、一生この場に来る事は無かったのだろう。そう思うと貴重な訪問だった。

車は再び出発し、海拔4000メートルの真っ青な空の下に何処までも緑の絨毯が広がっている高原地帯の道を、緩やかにアップダウンを繰り返しながら走り続けた。

そろそろ理塘の街が近づいてきたと思える頃、助手席にいた北京軍団のメンバーが窓の外に何かを見つけて「あれは何だ?」と声を上げ、運転していた石頭が車のスピードを緩めた。ウトウトしかけていた私が、座っていたのとは反対側の窓の外に目を向けた時には、特に気を惹かれなかったらしい北京軍団達は「別に立ち寄るほどじゃないだろう」と意見を一致させ再び車を走らせてしまったのだが、あっという間に後ろに流れていく景色の中にチベット仏教の祈禱旗であるタルチョが張り巡らされた岩山が目飛び込んできてハッとした。

そのとたん、私は前回の旅で強く強く希望していたにも拘らず、すっかり忘れていたある事柄を思い出し、亜丁を出てから沈みっぱなしだった気持ちや、次の目的を見つけた事で再び上昇線を描いてメラメラと燃え上がってくるのを感じていた。

(次号に続く)

告示!

第13回町田発国際ボランティア祭・2010夢広場は台風の為、12月5日(日)に延期になりました。

皆さん、是非ご訪問を!

多摩地区情報ウェブ「**タウンズウェブ**」

<http://towns-web.com/>

この春、長年にわたって多摩地区の人々に愛読され、惜しまれながら廃刊した「アサヒタウンズ」紙は市民の目線とこまめな取材による、密度の高い多摩地域情報紙でした。同紙の元記者5名の皆さんが、地域の要望に応えて、新しく多摩地域・情報掲示板として「タウンズウェブ」を発足させます。「アサヒタウンズ」紙から受け継ぐ精神で、同紙と同様の密度の高い、多摩の情報が得られると思っております。(田井)

体の免疫力を高める! 特別体験講座誰でもができる究極の養生運動を体験しよう!!

張紹成オリジナル 新・気功体操とエクササイズ

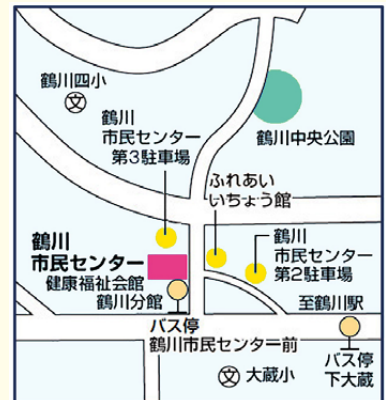
- 2010年11月12日(金) 14:00 ~ 15:30 ● 参加会費: 1500円 ● 定員: 25名
- 於: 鶴川市民センター・第二会議室 (町田市大蔵町1981-4 ☎735-5704)
鶴川駅前0番バス停13:35/47発 野津田車庫行・下大蔵下車徒歩5分
- ◆ 問合せ: ☎042-734-5100 'わんりい'
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



【張紹成・プロフィール】

中国戯曲大学卒業。京劇の花形俳優として、激しい立ち回りを役どころとし国内外で活躍の傍ら、中国武術家、気功の指導者としての多彩な経験をもとにオリジナル健康エクササイズを編み出し好評を得ている。「全国設計事務所健康保険組合」で講師/大阪樟蔭女子大学の非常勤講師

* 詳細は、<http://www.kyogeki.info/> をご覧ください。



せんし 中国剪紙(切り紙)展



黄河流域に広がる黄土高原の地で親から子へと伝えられてきた剪紙には、この厳しい大地に住む人々の願いと祈りが込められています。(わんりい10月号8~10ページ、丹羽朋子さんの文章を参照下さい)

2010年10月17日(日) ~ 12月19日(日)

9:00~17:00 (休館日: 火曜及び祝日の翌々日)
一般350円/小中学生及び65歳以上無料

於: 埼玉県山西省友好記念館・神怡館
〒368-0201 埼玉県秩父郡小鹿野町両神薄2245
<http://www.18.ocn.ne.jp/~ogano/shenyi.html>

【剪紙提供】日中文化交流市民サークル'わんりい' & 上河内美和(剪紙作家) 【映像提供】丹羽朋子(東京大学大学院文化人類学研究室博士課程) 【主催】(財)小鹿野町振興公社
【問合せ】神怡館 ☎0494-79-1493 / FAX 0494-79-1489 関連記事6ページ

まちだ雑学大学《第4回講座のご案内》

2010年12月3日(金) 13:30 ~ 16:00

会場: まちだ中央公民館7階ホール

「スリランカと私 - 20年間の関わりを通して」
為我井輝忠氏

参加費: 100円(資料代として)

* 多摩地区には各地に雑学大学がありますが、町田でも各地の活動に触発されて、9月に開講しました。今回長年スリランカとの交流に携わってきた為我井輝忠氏にお話しをしていただきます。

主催: まちだ雑学大学 <http://nishimoto2010.web.fc2.com/>
問合せ&申込み: 西元芳子(☎042-745-7608)

驚異のコラボ!!

森麻季(ソプラノ)、崔宗順(バス)、崔宗宝(バリトン)

♪♪♪ 世界名曲の贅沢競演 ♪♪♪

演奏曲目: 三大アヴェ・マリア/ラルゴ/献呈/マンマ/メリー・ウィドウ・ワルツ/愛しい父よ

* 司会: 青島広志 * ピアノ: 新居由佳梨

● 2010年12月12日(日) 15:00開演

● 会場: 海老名市文化会館・大ホール
〒243-0434 海老名市上郷476-2
小田急線・相鉄線「海老名駅」西口徒歩5分
JR相模線「海老名駅」東口徒歩5分

▲ 指定席: 4,000円 ▲ 自由席: 3,000円

● 主催: 崔宗宝音楽事務所

● チケット: 崔宗宝音楽事務所 ☎046-235-2716

第8回留学生トークプラザ

参加無料

~留学生は日本をどう見ているか~

11月7日(日) 14:00 ~ 17:00 定員 60名

会場: 町田市立中央図書館6階ホール

● 申込: 住所、氏名、参加人数と電話番号を明記して、「はがき」またはFAXで町田国際交流センター「留学生トークプラザ」係りまでお申してください。

● 主催: 町田市民フォーラム4F 町田国際交流センター
〒194-0013 町田市原町田4-9-8 FAX:042-722-5330
e-mail: info@machida-kokusai.jp

● 問い合わせ: 042-722-4260 町田国際交流センター

【11月の定例会と12月号のおたより発送予定日】

◆ 定例会: 11月15日(月) 13:30 ~

◆ 12月号おたより発送: 11月29日(月) 14:00 ~
共に田井宅です。どなたでもご参加下さい。